

特集 Special Feature

小さな林家の大きな出会い 林業の種まき

「そうそう、上手に切れよるよ」。都会から林業を学びに来た研修生を林家の奥田さんが優しい眼差しで見守っています。初めて体験する林業に目を輝かせる研修生。奥田さんも熱心に林業と向き合おうとする若者の姿がうれしいようです。林業の担い手不足の課題を抱える内子町。林業に関心のある都会の人たちを迎え、内子の林業を知る研修会を行いました。研修生も地域の人も元気が出るすてきな出会いとなりました。

山と生きるまち、内子町――



上川地区の里山の風景

山と生きる町

山々に囲まれた内子町は、山林の面積が全体の約8割を占めています。昔からスギやヒノキを主体とした林業が盛んで、まちの暮らしと山との関わりは、切り離すことはできません。例えば藩政期の頃は、木材を「筏流し」で大洲長浜の主流・肱川の河川まで運んでいました。筏流しは昭和28年まで行われ、今では川登地区の川まつりとしてその姿を残しています。また昭和期の木材ブームで、小田川沿いには多くの製材所などが建設されました。今でも林業を営む人は多く、林家の皆さんなどが愛情を持って木を育てていることが、山を守ることに繋がっています。

内子の林業の現状

近年、内子町の林業は厳しい状況が続いていました。昭和50年には1㎡当たりのスギ材の価格は、約3万6000円でしたが、平成21年には1万円程度まで下がります。現在はコロナ禍によるウッドショックで国内の木材価格が上昇。森林組合や木質バイオマス発電所などの積極的な取り組みもあり、林業は少しずつ元気になって

います。一方、長い低迷が影響し、担い手が育っていないことが課題となっています。植林から伐採・搬出までを自らが行う、いわゆる自伐林家は70代から80代の人がほとんどです。山を管理する山主が少なくなったこともあり、山を育てられる人がいなくなることが懸念されています。50年後のこの町の林業は誰が守るのか――。木を育てるだけでなく、人を育てる林業へ取り組みが内子町の喫緊の課題です。

林家に若者がやってきた

そんな中、新たに取り組まれたのが「ムラ暮らしインターン」小さな林業編です。将来の林業の担い手を発掘することを目的に、農林水産省の委託を受けた^(一社)九州のムラが企画、内子町のミカタスイチチ^(株)が受け皿となりました。内容は6泊7日で内子町に滞在し、田舎暮らしをしながら林家の手伝いなどをする――。10人の募集に対し18人の応募があったそう、林業や田舎暮らしへの関心の高さがうかがえます。

それぞれの思いでこの研修に参加した20～50代の人たちと、受け入れた林家の皆さんの姿から、この町の林業の今が見えてきました。



1_伐採した4分の1の木材を手作業で運ぶ 2_手入れの行き届いた山の中は明るい 3_初めて見た伐採に歓声を上げる 4_市場に木を出荷した後の晴れやかな笑顔 5_内子の木で木工品づくり 6_手が届かないくらい大きな幹 7_林内作業車の操縦の仕方を教わる 8_山仕事の途中で一休み

内子の林業を肌で学んだ1週間

内子町で行われた6泊7日の林業体験。都心部から参加した10人の研修生たちは、林家の皆さんや地域の人たちと触れ合い、何を学び何を感じたのでしょうか——。4人の研修生に話を聞きました。

「ムラ暮らしインターン」小
さな林業編」は10月10～16
日の7日間、小田地域を中心
に行われました。林家を目指
したい人、自然環境を守る活
動に興味がある人、地方への
移住を考えている人など、一
人一人がそれぞれ目標と熱意
を持ってこの研修に参加しま
した。研修生たちは2日間、
奥田義一さん、高本師津雄さ
ん、梅岡茂則さん、藤本博明
さんの林家の班に分かれ、林
業の仕事を手伝いました。
チェーンソーの使い方から
木材の伐採、搬出、出荷まで
の一連の作業を体験した研修
生は、「何十年も手を掛ける
仕事で、山への愛情がなけれ
ばできないと感じた」「また
一緒に手伝いたい」と充実し
た表情で話します。その姿か
ら真剣に林業と向き合おうと
いう気持ちが伝わります。
他には森林組合で内子町の
林業の現状を学ぶ研修やバイ
オマス発電所の視察、内子の
木を生かした木工品づくりな
どをしました。夜は小田地域
の3つの宿に分かれて宿泊。
町の人との交流やふれあいを
楽しみました。



研修生の声



人の温かさに心惹かれ
就職先の候補の一つに

小幡 成輝さん (21)
=東京都=

僕は木質バイオマス発電に興味があります。実際に見て、改めてその仕事の魅力を感じました。内子の発電所も就職先の候補の一つになりました。内子の皆さんは「林業を盛り上げたい」と熱い気持ちを持っていて、僕も何か力になりたいと思いました。

気軽に声を掛けられたのもうれしかったです。すれ違う子どもたちがあいさつしてくれたり、初対面なのに酒屋のおばちゃんと30分も話し込んだり(笑)いろいろな田舎に行ったけれど、こんなに温かく受け入れてくれたのは初めて。就職先と住む場所は切り離せません。知らない土地で暮らすのは勇気がいるけれど、内子町ならやっていけそうと感じました。



穏やかな人と自然に
心が癒された1週間

松下 唯さん (27)
=福岡県=

この町のすごさは、木を無駄なく生かしているところ。未利用材で発電したり、木工品を作ったりして、人の暮らしに還元しています。山を育てた人や自然への感謝が見えて、すてきでした。

体験した間伐材を運ぶ作業はかなりの重労働でしたが、あまりお金にならないことを知りました。それなのに何度もごちそうしてくれた缶コーヒーなどが本当にありがたく、お腹と心が温かさで満たされました。林家さんの優しさと屈託のない笑顔が忘れられません。都会の暮らしやコロナ禍で、人や環境に疲れていたけれど、内子町の穏やかな自然や人に触れて心も体も癒されました。

山の中から見えた
林業の魅力と課題

宮部 壮貴さん (22)
=東京都=



枝打ちや玉切り、搬出を体験しました。林業の面白さを味わえ、手入れの届いた山の中は気持ち良かったです。2センチほどの枝でもなかなか切り落とせないし、木を運ぶのも大変で、体力に自信がある僕でもしんどかったです。81歳の奥田さんは慣れた手つきで作業をこなし、年齢を感じさせない力強さに驚きました。狙った所に木を倒す技術もすごかったです。でも、3カ月前に足をけがしたと知り、少し心配になりました。熟練の技の後継者がいないのも寂しいです。僕は国家公務員を目指しています。国を支えている地域の一次産業が元気になるよう、奥田さんたちの姿を思い出しながら政策を考えたいです。

本物の林家さんと出会い
将来の道が少し見えた

小林 建太さん (32)
=大阪府=



将来は林家になるつもりで、この研修に臨みました。特に心に残ったのは林家の奥田さんの姿です。「木は我が子と同じ」と話す笑顔に山への愛情を感じ、「いい木を育てて周囲の信頼に応えたい」と作業する姿に、林家としてのプライドを感じました。

林業への道をどう踏み出せばいいか迷っている僕に、奥田さんは「森林組合で経験を積んでから独り立ちするのも一つの道」と助言をくれました。40年以上も山と本気で向き合ってきた人の言葉は心に響き、モヤがかかっていた気持ちに光が差し込みました。奥田さんと一緒に山仕事をしたことはずっと忘れません。貴重な体験をありがとうございました。



林業や町の未来への いい種まき

ミカタスイッチ(株)
納堂 邦弘^{くにひろ}さん(47) = 小田下 =

「ムラ暮らしインターン～小さな林業編～」の内子町側の責任者として不安もありましたが、とてもいい経験になりました。研修生たちの言葉から、内子町や林業には都会にはない魅力がたくさんあることが改めてよく分かりました。林家の皆さんが喜んでくれたこともうれしいです。木を育て、山を守り続けることは、町にとっても大切な役割を果たしています。ただ、実感できる機会は少ないので、梅岡さんの「研修生の喜ぶ姿を見て、自分の仕事に誇りを持てた」という感想が心に響きました。

気軽に話しかけてくるおっちゃんや、元気にあいさつしてくれる子どもたち、困っていたら助けてくれたおばちゃん——。内子町民にとっての当たり前は、都会では考えられないことだったりします。わずか1週間でしたが、心温まる体験をした研修生の皆さんは、一生内子町のことを忘れないと思います。受け入れた私たちも町のよさを再認識できました。みんなが前を向ける取り組みで、林業や町の未来へのいい種まきになったのではないのでしょうか。



1_ 枝打ちの様子を見守る 2_ 林家の片腕、林内作業車 3_ チェンソーで切る角度を指導

に目を向けてほしい、担い手を増やしたいと思っていたので、今回のような取り組みは林家にとって、希望の光のように感じました。これからは林業を学びたい人がいれば喜んで受け入れたいです。自分が身に付けた技術も山の育て方も惜しみなく伝えたいと思っています。小さなことかもしれませんが、何度も繰り返すことで、現状を変えられるかもしれません。今回の研修生のような若者の姿を見たら、町内の若者にも林家の魅力が伝わると思います。林業に活気が出れば、町の元気につながる——。そう信じてこれからも頑張ります。

研修生の笑顔に元気をもらった

林業の担い手の課題はすぐに解決できるものではありません。でも、何もしなければ何も変わらない。今回の研修で林家の心境にも変化がありました。研修生を受け入れた林家の一人、梅岡茂則さんに思いを聞きました。

山も人も育てるのは難しい

定年退職をしてからは山一筋の林家で、先祖から受け継いだ山を守ってきました。内子町で林業をする人は随分減り、山を育てるのも、人を育てるのも難しくなってきました。林家の仕事は土壌を保全し、豊かな自然環境を育み、町や地球の環境も守っています。私たちのような林家がいなくなると山が廃れてしまうと心配しています。

研修生に元気をもらった

このような研修を受け入れるのは初めて。参加者以上の

都会の研修生の生き生きとした表情 その輝きに林業の未来を感じた



内子町林業研究グループ会長
梅岡 茂則^{しげのり}さん(71) = 乙成 =

応募があったと聞いて、都会には林家の仕事や自然、田舎に関心のある人が多いことを知りました。研修生たちは普段のなりわいを見てくれて、山仕事も一緒に手伝ってくれました。私の山を見て「気持ちがいい」「きれい」と目を輝かせてくれたことがうれしかったです。自分たちが今まで頑張ってきたことが報われたような気がしました。研修生の声に元気をもらい、自分の仕事に誇りを持ちました。

この取り組みは希望の光

一人でも多くの人に林業